

## まちの皆様インタビュー！

進修館と勝木祐仁さんとのつながりは、2017年頃。宮代町の町制施行60年にちなみ、町民有志の提案で進修館が事務局となつてはじめた、地域の集会所を会場とした写真展「まちをアルバムにする」という事業がきっかけでした。今回は、対話を大切にしながら一緒にこの企画を紡いできた、日本工業大学建築学部建築学科の勝木祐仁さんにお話を伺いました。

### 【「まちをアルバムにする」を通じて】

「まちをアルバムにする（通称「まちアルバム」）」とは、地域の方々が生活の中で撮影した写真を集会所に持ち寄っていただき、それをスキャンしてデジタルデータ化し、プリントしなおして会場に展示するという企画です。地域コミュニティの拠点である集会所で行うことで、会場が地域のアルバムようになり、開催会場が増えていくことで、町全体が暮らし人々の営みが積み重なるアルバムになっていきます。この企画では、地域のお祭りやかつての町並みなどの写真のほか、家族を撮影したスナップ写真など、様々な写真をスキャンする作業を通して、提供者の方々が「この時はこんなことがあった」など思い出話をしてください。また、展示会場では「この人、最近会っていないけれど元気かしら」など、地域のつながりを感じる会話がはず

みます。この「まちアルバム」を和戸町内会の協力のもと和戸宿集会所において2017年に開催した折、ご一緒したのが日本工業大学・勝木研究室でした。「まちアルバム」に関わるにあたって勝木研究室では、写真一枚一枚に込められた物語や、暮らしについてのお話を伺う対話を大切にしています。写真をきっかけに交わされる会話などから派生して記憶をよみがえらせる様をみるのが何よりも楽しいとのこと、波紋のように次から次へとこだまするように思い出話が呼応し、対話を通じてその人しか経験していないそれぞれが持っている風景や暮らしてきた想いなどに思いをはせられることに大きな価値を感じるとおっしゃっていました。東条原自治会の協力のもと開催した際には、写真を等身大のパネルにして展示することで、あたかも撮影した時のその場所にいるかのように感じられる空間が作り出され好評を博しました。

### 【「進修館をアルバムにする」を開催】

その後、コロナ禍の中で迎えた進修館40周年となる2020年には、「進修館をアルバムにする」と題して広く写真を募りました。シンボリックなアイコンとしてのイメージを持たれている進修館ですが、実際に写真を通じて話を伺うときわめてプライベートな思い出が語られ、個人的な記憶

このコーナーでは、宮代町に在住・在勤・在学生など宮代町に関わる方々にお話を伺っています。



「進修館をアルバムにする」を通じて、誰にでもわかりやすく進修館が積み重ねてきた時間を表現してくださる勝木さん。

にたどり着くことができ、この場所で多様な人が多様な時間を過ごしたのだということを実感したとのこと。なかなか目に見えにくく、記録にも残りにくい、そこで積み重ねられた人々の時間や記憶を、等身大パネルの展示や、写真提供者のインタビューと展示の様子を重ね合わせた動画の制作を通じて表現しました。

### 【息の長いプロジェクトとして】

等身大パネルが展示された進修館は、時間を超えて様々な人の記憶が一つの空間に多層的に表現され不思議な空間になります。時を重ねた公共的な建築の新しい価値の表現として、今後もコツコツ続けていきたい、と勝木さんは話していらっしゃいました。

## 教えて、田沼さん！「進修館のあんなこと、こんなこと」第6回

このコーナーでは、進修館の建設時に宮代町役場職員として関わった田沼繁雄さんに、当時のエピソードなどを伺います。

進修館を設計した「象設計集団」が設計にあたって大切にしている「七つの原則」のひとつに「場所の表現」というものがあります。

### 【場所の表現】

私たちは、建築がその建つ場所を映し出すことを望んでいます。デザインが場所や地域の固有性を表現するよう努めます。村を歩きまわり、景観を調査して、土地が培ってきた表情を学びます。人々の暮らしを見つめ、土地の歴史を調べます。このようにして、デザインのなかにその場所らしさを表現するための鍵やきっかけを掘り起こしてゆきます。

出典：象設計集団ホームページ「七つの原則」より

「その土地らしさを表現する」ことを大切にしている象設計集団は、極力現地調査には時間をかけるようにし、そこに暮らす人々の暮らしや歴史を丹念にたどっていきます。地元の人にとっては日常の事柄になっている地域に昔から根ざすものの良さを、いわば「よそ者」である象設計集団が発見し、建物に取り入れることによって表現し

てくれています。そして「地域の人々が、その建物から自分たちの暮らし場所の素晴らしさを改めて気づき、愛着を持って使うように」と願って設計されています。

進修館を設計する際は、「世界のどこにもない建築を」との要望のもとに設計を進め、世界の歴史的な資料を調べたり、現地調査を重ねたりしながら「集会所って何だろう」

と検討することから始め、地域の人々のアイデアも取り入れながら時間をかけて取り組みました。これはまさに「作品」です。

建設時に宮代町役場の担当者として象設計集団のみなさんと時間を共にした田沼さんは、現地調査や建設の過程で、彼らと深い交流があったそうです。良いものをつくりあげるためにメンバーや業者は議論に多くの時間を費やしたそうで、白熱して帰れなくなり、田沼さん宅に泊めてあげることもしばしば。その中で信頼関係ははくぐまれ、また楽しく濃密な時間を過ごされたそうです。そんな「熱い思い」の結晶として、宮代町を表現した作品である進修館が生まれたのです。

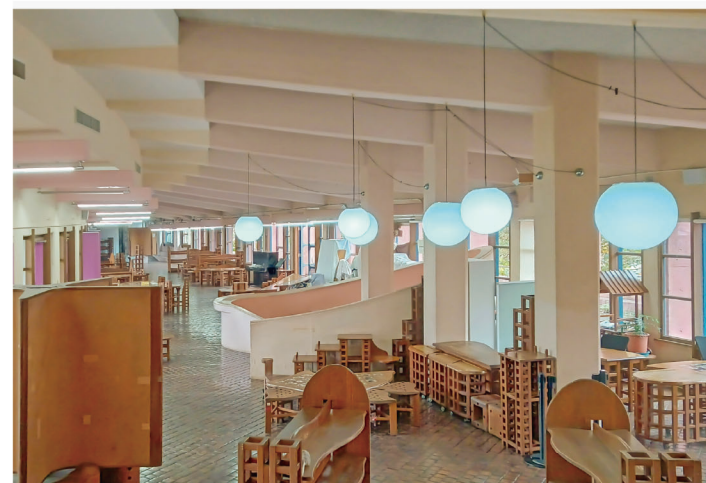
イラスト提供：象設計集団 樋口裕康氏



進修館を設計するにあたり、建築家の樋口裕康さんが描いたエスキースの数々。現地調査に基づき、様々な検討をしている様子が伺えます。

## 「外」から再発見、進修館の魅力」第4回

このコーナーは、進修館でアルバイトしている日本工業大学の学生（地元は福島県）が、町外から宮代町に越してきて感じた、進修館の魅力について語るコーナーです。



象設計集団の七つの原則、「あいまいもこ」を表現したというロビー。文字通りあいまいであたたかなカーブに包まれています。天井にある大きな梁は全て“世界の中心”に向かってのりだとか。



みなさん、こんにちは！日本工業大学建築学科1年の浦山です。今回皆さんにお伝えする魅力の場所はロビーです！進修館のロビーは朝10時から夜18時まで一般開放されており、平素から大変にぎわっています。こちらのロビーですが、実は僕が最初に

進修館で訪れたのもこの場所でした。僕が生まれ育った福島はとても田舎で人が全然いませんでした。地元では子供はおろか、大人の姿さえめったに見かけません。そんな中、8月に初めて宮代町に訪れ進修館のロビーを見たとき、大人も子供も入り混じ

って集まっている光景にとっても惹かれたのです。なにせ地元では人の声を聞くのも珍しかったのですから、その光景にとっても幸せを感じました。進修館のロビーは（というか進修館は）ほかの一般的な公共建築物とは大きく違って建物への入り口がとてもたくさんあります。進修館の特徴でもある芝生広場との関係で、入るのも出るのもまさに自由！ロビーの中に入ると宮代町を表現した家具の数々から、奥の棧敷までとても多くの座席が確保されています。大人も子供も訪れた人が各々好きな場所で様々な過ごし方をしています。僕はそんな様子もロビーならではの、宮代町ならではの景色だと思いつつも気に入っています！

今回は進修館のロビーについて“外”から魅力をお伝えさせていただきました。みなさんも進修館のロビーを訪れた際にはぜひ少し視線をあげてそこに居る“人”にも注目してみてください！



東条原自治会で開催した「まちをアルバムにする」の際に初めて登場した「等身大パネル」。その迫力に地域の皆さんも驚いていました。



進修館の開館40周年を記念して制作展示された等身大パネルたち。多様な時間と記憶が一堂に集まりました。

### 「進修館をアルバムにする」写真募集中！

長期的に写真を募り、提供者との対話を通じて進修館の記録を表現していきたい、という勝木さん。今後もコツコツと写真を募集し、この企画をゆくり育てていきたいとおっしゃっています。ご興味ございましたら、勝木研究室へご連絡ください。また、3月に開催されるアートプロジェクト「へそたんけん2025」でも展示を予定しています。

